

第2節 「先生、私の出身を皆には言わないで」

—二つの祖国を生きて(教材1-2)

大橋 春美

私は、1970年に、中国の遼寧省沈陽市に生まれました。当地は、昭和の初期から昭和20年まで、満州国奉天と呼ばれていました。戦前、私の父方の祖父母は、夢と希望を胸に、新天地を求めて、満蒙開拓に満州国に渡りました。戦中、祖父は病死し、祖母と父は満州に取り残されてしまいました。私はこの日本人残留孤児である父と、中国人である母との間に生まれました。

私の名は、中国名をツァオ・ツウンヤン(趙春艶)といいます。周りを明るく華やかに彩る春の花々のように、元気で幸せに生きてほしい、という両親の願いが、「春艶」の二文字に込められています。

1978年(昭和53年)、私たち一家は日本に引き揚げてきましたが、残念ながら祖母はその6年前に他界していました。帰国の際に、私は日本名を宮下春美と名付けられました。苗字は父方のもので、名前は中国名の「春艶」の「春」を一文字とって、日本人らしく「春美」となりました。何もかもがゼロからのスタートでした。生活用品や衣類などは近所の方々が寄付してくださいました。最初は、文化の違いや生活習慣の違いに、非常に戸惑いましたが、周りの暖かい心づかいのおかげで、少しずつ日本の生活に慣れていきました。

しかし、すべてが順調だったわけではありません。日本に帰ってきて一番切ない思いをしたのは、私が、友達をつくろうと思って習いたての日本語を、勇気を出して話した途端に「あっ、中国人だ」と言われた時です。この「中国人だ」という言葉は、当時は強烈な差別用語に感じました。日本に来た当初は自分は中国に生まれて中国で育ったので、その意味での「中国人」と理解し、自分から「私は中国人です」と平気で言っていました。しかし、日本で生活していくうちに、「中国人」と言われることに差別や偏見を感じるようになりました。

中学生の時、国語の漢詩の授業で、先生から「この漢詩を読んでもくれないか。韻が分かるから」と言われた時はすごく複雑な心境でした。「友達が話せない中国語を話せる。立派だし、いいことじゃないか」と先生の気持ちをくみ取りたい自分と、そんなことしたらまた「中国人だ」と言われてしまう、とためらう自分がいました。そのころ、「中国人は汚い」「中国乞食」「残留乞食」と陰からの言葉を耳にするうちに、私は、自分の中にある中国の部分をだんだん否定するようになりました。

「できれば、自分の中国の部分、中国名を心の中から無くせたらどんなにか楽なのに」

と思いました。中国の部分が、まるで悪い病気のように感じられ、そこさえなくしてしまえば、どんなに私は幸せだろうとずっと悩んでいました。小学校・中学校時代は、周りが私が中国から帰ってきたことを知っていますので、自分の出身を隠そうと思っても隠し切れませんでした。高校に入ったのを機に、「とにかく中国から帰ってきたことを周りに知られてはいけない、どんなに自分を偽っても」と決意しました。

高校の時に、漢文の先生が、授業が始まる前に私の所に来て「この漢詩を、韻を理解させるために、ちょっと読んでくれないか。」と、中学の時と同じように言われたことがありました。その時、私は「先生はどうして私が、中国から帰ってきたことを知っているんだろう」と、とても驚きました。私は、先生にこう言いました。「先生、それだけではできません。私は、クラスの皆に中国からきたことは話していません。これからも話したくないし、なるべくなら知られたくないです。」と。漢文の先生は私の気持ちを理解してくださり、「そうか」とうなずいてくださいました。しかし漢詩の授業を受けるときは、不安で不安でなりませんでした。

中国語が響いてくると、中国の血が騒いでなりませんでした。両親は、「二ヶ国語が分かっているではないか。誇りにしなさい。」とよく私に言いましたが、私は、高校・大学の7年間、自分の生い立ちをずっと周りの人に隠していました。時が経ち、中学時代からの夢が実現し、教師として、A中学校に赴任しました。この時期、このまま平穩に過ぎていくものだと思っていましたが、赴任して間もなく、自分と同じ帰国子女がA中学校に入ってくることになったのです。私は、また自分が隠そうとしている中国の部分がばれてしまうという不安の念に駆られました。と同時に、いつかこの隠している部分を言わないと、自分自身、ずっと何か負を背負った存在になってしまうのではないかと思うようになりました。県内に帰国者二世三世が数多くいることや、彼らが、いろいろな悩みを抱えていることを知るにつけ、私は、このまま自分をいつわっていいのだろうか、と自分自身に問いかけました。

そんな葛藤^{かつとう}の中、帰国者担当の先生方の集いがありました。その席で、いつの間にか「私は、中国残留孤児二世です。」と発表していました。その時は、頭の中が真っ白になって、くらくなりました。しかし、その集いの後の帰り道で、私は何かすっきりした気分になりました。これを機に、私は高校や大学の友人に手紙を書きました。友人達の一人はこう言ってくれました。「そんなこと気にすることなかったのに。春美さんは春美さんでしょう。どこで生まれ、育ったって。」と。

こうして、ようやく自分の中で、中国の「趙春艶」という部分と日本の「宮下春美」の部分の一つになって形成され始めたことを実感しました。その時、これから私は堂々と自分のことを話せるようになろうと思いました。今、私は、中国の部分・日本の部分二つの祖国を大事にしてハーフではなくてダブルとして前向きに生きていこうと思っています。(文中の「宮下」は大橋さんの旧姓です。)

『先生、私の出身を皆に言わないで』（教材1-2）について

ねらい

この教材は、長野県内の中学校教師・大橋春美さんが、1998年に、「私の歩んできた道—二つの祖国を生きて」（「水と村の歴史—信州農村開発史研究所第14号 1999.7所収」と題して講演された内容をもとに、特に、彼女の高校生時代の心情を中心にして、まとめたものです。中国からの帰国子女として、また多感な高校生として生きる「春美さん」が言葉や生活習慣の違いの中で、差別や偏見を乗り越えようとする心の葛藤や、二つの祖国を持って生きていこうとする決意にふれることを通して、平和の尊さ、異文化理解、自己の確立など、広い視点から、人権の尊重とアイデンティティの確立について、学び合うことをねらいとしています。

進め方 (例)

(1) 導入

① 「自分だけ他の人たちとちがう」といった体験や、その時の気持ちを出し合う。

(2) 展開

① 体験文『先生、私の出身を言わないで』を読んで、自分の一番考えさせられた箇所や共感した箇所を探す。（自分との重なりをもつ）

② 「中国人としての部分を否定しようとしているものは何か」を話し合う。

- ・「日本人」として生きようとした自分が「中国人」と見られていること
- ・マイノリティとしての存在感
- ・「汚い」「乞食」等の偏見

③ 「自分の中国の部分を他の人に言えるようにさせたものは何か」話し合う。

- ・自分に納得のいく生き方をしたい
- ・隠しきれない苦しさ
- ・同じような思いを抱いている仲間が存在
- ・周りの人々の理解

④ 二つの祖国を持って生きていくことの意義を考える。

⑤ 「満蒙開拓」と日本の歴史について学び合う。（次ページ及び巻末参照）

(3) まとめ

① 自分の周りに帰国子女のような立場の人がいたらどうしていたか。自分自身がマイノリティのような存在を感じた時どう乗り越えていこうとしていたか。自分自身の高校生活をふりかえり、今後の高校生活をみつめる。

発展

① 実際に、在日外国人たちとの交流会を行なう。

② 第3章第3節 『アフリカ人妻の活躍』につなげる。

③ 「なかまとともに」（改訂版）（長野県高校教文会議 同和教育専門委員会 同時代社1988年）P.84—93参照。

参考文献

- ・「大地の子」山崎豊子（文春文庫 1巻～4巻）
- ・「終わりなき旅」井出孫六（岩波書店）

満蒙開拓と長野県

昭和7年(1932年)から始まった満州方面への開拓。長野県からは、最も多い3万3千人



移民を見送る人々

余人余りの人が満州(中国東北地方)へ渡りました。その後、第二次世界大戦で多くの人が犠牲となりました。

世界恐慌の影響から経済状況がどん底であった昭和8年満州事変が起こり、翌年満州国が建国されました。この経済危機を脱するため軍部および政府は「満州は日本の生命線である」とし、同8年満州移民に関する大綱を発表し、農村が抱える経済的不況と余剰人員

問題の解決及び満州国を守るという立場から移民を推進しました。満州は「二十町歩の地主になれる新天地である」と宣伝され、夢をかきたてられた農民を中心に、移民への関心が高まりました。

移民は満州事変直後からの満州国警備を目的とする武装移民にはじまり、次に拓務省の「二十カ年百万戸移民計画」により長野県では「信濃村建設移民計画」が実施されました。

さらに、満州が戦争物資の基地である重要性から青少年の移民を送り出し、戦力の増強をはかるために、「満蒙開拓青少年義勇軍」が編成されました。その後、最終的には、県下各村を分村し次男、三男や貧しい農民を満州に送り出し、親村では経営規模を拡大し農家の負債を返済させて立ち直らせることを目的とした分村移民が行われました。

長野県から送り出された開拓農民・満蒙開拓青少年義勇軍はいずれも全国一位で総数は約3万3000人でした。(本書巻末資料 p.129—130参照)

戦況の変化とともに、開拓団から応召が続き、開拓団には働き盛りの男たちがいなくなってしまうました。昭和20年8月8日ソ連が日本へ宣戦布告し、ソ連兵がシベリヤを越えて満州国に攻め込んできました。また土地を開拓団に奪われたり、虐待されていた現地の民衆からも開拓団は襲われることになり、過酷な逃避行が始まりました。長野県で開拓に加わりその後帰国した者は半数にも満たない状況でした。逃避行の途中で死亡または集団自決をしたり、孤児となり帰国できなかつた者も多かつたのです。

参考文献

- ・「長野県史通史編第9巻 近代三」
- ・「親と子のための長野県の歴史」(監修 児玉幸多 信濃毎日新聞社)
- ・「満蒙開拓の手記 長野県人の記録」(NHK 長野放送局) 他

啓発資料

同和教育つうしん

第17号

発行 長野県教育委員会同和教育課
 発行人 沼田 忠一
 長野市大字南長野字幅下692-2
 電話 026-235-7452

私は中国帰国者として一九七九年日本へ永住帰国しました。日本人である父の生まれ故郷の下伊那郡豊丘村で新生活を始めたのは、ちょうど十歳のときです。母は中国人で、私は中国で生まれ育つたため、自分は中国人であるという意識がありました。帰国当初は、日本名を名乗っている自分に違和感を覚えたものです。当初、学校のクラスメイトや、先生たちは温かく迎え入れてくれました。

ところが怖かったです。私が中国出身であることが分かれると、その友だちの態度が変わってしまうのではないかと不安でした。日本名に違和感を覚えていたのは反対に、次第に自分の中の「中国」をすべてネガティブにとらえ、中国名を記憶から消してしまいたいと思ってしまうようになっていました。早く日本語を習得し、「中国人」と言われないようにしたい。早く、

私の中の「趙春艶」という存在をも否定しているのではないかと自分自身を責めました。そんな私の気持ちを察してか、当時の小学校の担任の先生はこう言ってくれました。「春美さんとはみんなにないすばらしいものをもっていきなさいか。何でそれを恥じるの。恥じることもないよ。もっと自分に自信をもって」この言葉が、どれだけ当時の私を慰め、励みになったことか。今でもこの恩師の言葉を忘れることはできません。

帰国して四年間の小学校生活は私に、日本での前向きに頑張っていく精神と自信を培ってくれたと思います。時には、「お前は中国人だ」「チャイニーズ」「残留こじき」などから残り、悔しくて、悔しくて家へ帰って泣いたこともよくありました。しかし、私は小学校、中学校の七年間、一日も学校を欠席したことがありませんでした。苦しい生活の中でも、それを乗り越えることのできる強い心を育ててくれた中国の生活があったからだと思います。その後、言語に興味をもつようになった私は大学の英文科を卒業後、英語の教師になりました。

最近、私は少しずつ自分には幸せなんだと思えるようになってきました。中国と日本の二つの言葉、二つの文化を共有しているし、だれにもできない経験をしてきたからです。今、私は失われた自分の中の「中国」を取り戻そうと必死です。私は、教師として、また中国帰国者として、帰国児童生徒や外国籍児童生徒に、日本人への同化を求めるのではなく、母国の文化や言語に誇りを持つような指導をしていく必要があると思っています。それと同時に、日本の児童生徒が異文化を尊重し、それを認めることのできる寛容性を培っていくことができる指導・支援をしたいと思っています。(立科中学校教諭 宮下春美)

この「同和教育つうしん」に掲載している記事を企業内広報紙・PTA広報紙等に自由に転載し、啓発・広報に役立ててください。

二つの祖国 プラス思考で

ヒューマン情報 世界人権宣言 五十年